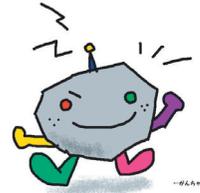


erudio 4



夢、かなえよう！
いーはとーぶの学び舎で

4月より Iⁿ Assistant 試験運用開始！
https://ia.iwate-u.ac.jp/

月	火	水	木	金
1-2			情報処理演習B/ 52/BBB	
3-4				
5-6	情報基礎/ 47/ccc			
7-8				
9-10				情報基礎/ 47/DDD

Iⁿ Assistant 個人専用ページ

※画面は試作品です。実際とは異なる場合があります。

目 次	
センター長より	2
新任教員より	5
全学共通教育企画・実施部門	6
教育評価・改善部門	11
専門教育関係連絡調整部門	16
活動日誌	17
現代 GP	18
岩手大学全学共通教育の概要	20
I ⁿ Assistant	21

センター長より

就任して9ヶ月

大学教育センター長 玉 真之介

* 経験不足

センター長となって9ヶ月が経過しました。つくづく思うことは経験不足です。私は、岩手大学に着任した最初から大学院連合農学研究科の専任教員でしたので、教務委員や入試委員など学部内の委員の経験がありません。ましてや全学共通教育や大学教育センターの運営委員会の経験もない。何もかもが新しい経験という有り様でした。

この結果、随分とトンチンカンなことを言ったり、思いつきの提案をしたり、とセンターの運営にご迷惑をかけてきたように思います。各学部の運営委員のみなさんにもご迷惑をかけたように思います。その点、お詫びするとともに、支えてくださった多くの方に感謝申し上げます。

* 改革案の現段階

この間の大きな懸案は、全学共通教育の改革案を大学全体の理解と協力の下に実施できる内容に煮詰めていくことでした。焦点は、「全教員担当体制」でしたし、「転換教育」の位置づけでした。この点は、初年次教育を充実させるという観点から、「転換教育」の担当を全学共通教育担当と位置づけることでクリアされました。

理念と特色については、学務担当理事室の提案のESDを改革案に取り入れることが了解されました。また、全教員がともかくいずれかの分科会に登録することも、12月28日の臨時運営委員会です承され、この2月から仮

登録がはじまりました。

今後は、「転換教育」のガイドラインや時間割をワーキンググループで詰め、合わせてESDの具体化を図るなどして、改革骨子案のver.4をとりまとめて、6月頃までに全学的な合意を得ることが課題となります。

* 「幅広い職業人養成」

いまこの時期に、全学共通教育に関心が高まり、運営委員会の場で白熱した議論が展開されていることは、岩手大学の将来を考えたときに大変に意義深いことです。昨年1月に中央教育審議会から出された『我が国の高等教育の将来像』は、21世紀を「知識基盤社会」と位置づけ、高等教育に対して専門性と同時に、幅広い教養、高い公共性、倫理性をもって社会を改善していく人材の育成を求めています。それを象徴するのが「幅広い職業人養成」という言葉です。

大学教育センターは、4月から大学教育総合センターとなりますが、全学共通教育を「幅広い職業人養成」と結びつけて充実させること、そして、もう一つの重要課題である単位制度の実質化、この2点について、引き続き10年後の岩手大学を展望した改革案の提示をしていきたいと考えています。

センター長より

「持続可能な未来のための教育」を岩手大学の旗印に

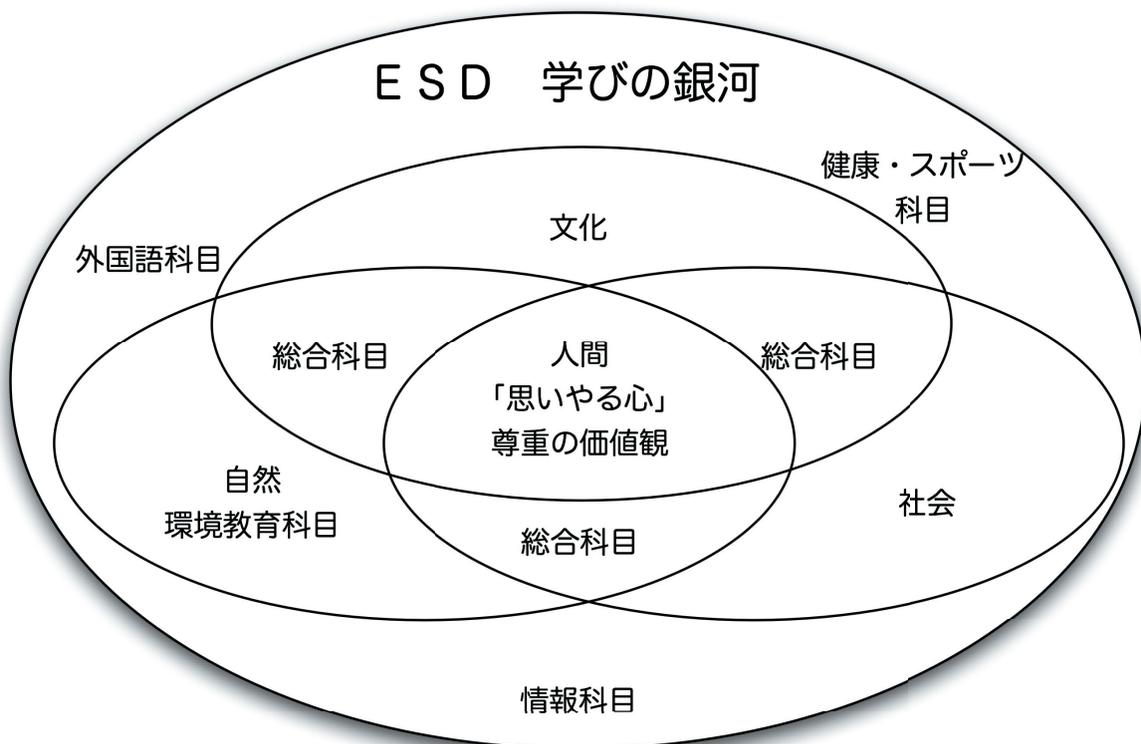
いよいよ日本の人口減少が始まりました。少子高齢化社会の本番です。環境破壊は続いています。景気は多少回復しても格差が広がっています。こうした中で、若者たちは、「漠然とした将来への不安」を抱いているのではないのでしょうか。

私たちが日々行っている教育も研究も、「持続可能な未来」を作っていくことから外れるものはないと思います。また、外れるものであってはならないと思います。そうであるなら、若者たちにもっとはつきりと、岩手大学で「持続可能な未来」のために学ぶことを呼びかけてはどうでしょうか。

ESD(Education for Sustainable Development)は、将来の世代を思いやる、地球上の他の人々の生活を思いやる、そうした尊重の価値観を中心に置いて、さまざまの

教育をつないでいく取り組みです。また、地域に足場を置いて「具体的な行動」に結びつけてゆく取り組みです。学生の主体的参加を促し、体験を重視し、思考力や批判力を養って問題解決能力を育む取り組みです。

これまで求心力を欠いた感のある全学共通教育を、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はない」といった宮澤賢治の「思いやる心」を中心に置いて、「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」「環境教育科目」「総合科目」「外国語科目」「健康・スポーツ」「情報科目」を「学びの銀河」としてマッピングしてはどうでしょうか。そこで、学生が自分で履修科目を線でつないでESDの星座を作るとするのは、空想的でしょうか。



新任教員より

*抱負と課題

全学共通教育企画・実施部門

山崎 憲治

岩手大学が目指す方向は何処にあるか、実現可能なプログラムをどう組むか、という課題の追求とともに、現実の壁の厚さを実感することが多くなってきました。今回、全学共通教育全教員担当体制が立ち上がりましたが、その内実をいかに作るかが問われています。「ちぢみ」の方向では、社会のニーズに対応できる共通教育は実現不能のように思えます。

2005年12月25日から、ウインターセッションが行われました。最初は大学への体験という範疇で捉えた生徒も少なくないと思います。しかし、講義が進み、二日目、三日目になると進路希望は普通名詞「大学」から、「岩手大学」という固有名詞に変わっていきます。この普通名詞から固有名詞へ転換する生徒の期待に十分こたえることが必要と思います。地域の中核の大学の役割があります。多様なニーズの中に、大学のフィロソフィーを授業の中に織り込み、学問の方向づけを明確に示すことが問われています。高校生と3日間付き合っ、こんなことを学ぶことが出来ました。

「夢を語る共通教育」でなければならないと思っています。高校を卒業したての学生にとって、教科書を使わない授業は戸惑いを感じるに違いありません。共通教育で、学習の夢が現実になることを学生が実感すれば、大学教育全体が活性化の方向に確実に向かいます。今日という時代をきちんと認識でき、現代が抱える課題に正面から立ち向かううえで、共通教育のはたす役割はきわめて大きいはずです。

ユネスコは1947年に国際成人教育会議を立ち上げました。第四回会議はパリで行われ、「学習権」は万人が平等に享受できる権利であることが満場一致で採択されました。そして、1997年第五回のハンブルク大会では、「生態的に持続可能な発展と民主主義の実現」が宣言されました。後年課題になるESDにつながるものです。「21世紀の鍵」としての教育が論じられ時代と学問の方向付けが示されています。

どのような「鍵」を創造するのか、「夢をかなえる鍵」でなくてはならないと思います。岩手の大地に多くの高校生が集まってくる、これを「夢物語」にするのか現実に向けた「具体的プログラム」にするか、岐路に差し掛かっていると考えています。「具体的プログラム」にするか岐路に差し掛かっていると考えています。

*着任の挨拶

教育評価・改善部門

福永 良浩

着任してからはや5ヶ月程になりますが、大学教育センターでの仕事は様々な教育改革や取組に関して困難な課題も多く、頭の中を整理するのがやっとというところではあります。私見ではありますが、学生にとっての教養というのは、自身が興味や関心によって受講してきた内容などが、今後実社会に出てからある場面で少しでも振り返れたときに、学んできたことの大切さや考え方を実感できることが真の教養であると思います。また、これは大学側で区分(全学共通教育や専門教育)している以上に壮大なものであり、これらが複雑に絡み合っているからこそ、様々なものの考え方を培うことができると考えております。つまり、真の教養を学生自身の手によって創りあげることができるように、先生方と共に大学教育センターとして様々な面から支援していけるように汗をかいていきたい所存です。また、岩手大学として、この真の教養をより円滑に実践的かつ有意義なものとするには、特色ある大学の教育基盤と成しえるものであり、また岩手の各地域を巻き込んだ教育や研究を行う魅力ある大学により拍車をかけることが可能であると考えています。

一方、全学統一拡張Webシラバスの構築のプロジェクトにあたっては、各学部のシラバスをいかに統一し、より良いシステムにするかなど、単なるWeb版のシラバスではなく、統合された学習支援システムとしての役割もあることから、特に授業内外での利用を想定した部分や使いやすいユーザインターフェースの設計に難しさを日々痛感しております。今後、この全学統一拡張Webシラバス「I⁺ Assistant: アイ・アシスタント」を教職員および学生の方々に有効に利用して頂き、「I⁺」してもらえるように努力していきたい所存です。ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。



全学共通教育企画・実施部門

全学共通教育改革

全学共通教育企画・実施部門 山崎 憲治

*改革を必然化させる土壌

平成13年2月教育に関する7つの審議会が統合され、中央教育審議会が発足しました。この審議会は教育の全体に亘る、文字通りゆりかごから生涯にわたるあらゆる教育問題を審議することになりました。大学設置基準の大綱化(平成3年)のもと、大学は大幅な規制緩和の下に置かれました。18歳人口の減少、知識・情報社会の進展、国立大学の独立行政法人化の中で、中教審から「わが国の高等教育の将来像」答申(平成17年1月)が出されました。各大学は、厳しい競争的環境の下で、特性を発揮できるグランドデザインの企画・実施が強く求められています。

全学共通教育企画・実施部門は、岩手大学として特色ある全学共通教育を打ち立て・実施することが求められています。そこで中教審答申、岩手大学の歴史、地域・社会の課題という3つの視座から、岩手大学の全学共通教育をとらえなおし、改革の方向性を簡潔に描いてみましょう。

*改革の方向

一連の答申から全学共通教育を捉えなおすと、課題探求能力、知識基盤社会、21世紀市民というキーワードをあげることができます。一方、岩手の地域が有す豊かさを発掘し、現実の課題を把握する能力も問われています。また、岩手大学の持つ歴史を現在に生かし、地域中核大学の役割も果たさねばならない点も重要です。

平成19年度から、全学共通教育全教員実施が始まります。実施体制の受け皿として、新分科会の登録が行われようとしています。新分科会から多様で魅力的な科目が一つでも生まれれば、それが岩手大学の新しい内容を作っていきます。

1990年代以降、世界史の流れの中で生まれたESD(Education for Sustainable Development)を全学共通教育の旗印にすることが提起されています。「持続可能な未来」はいずれの分科会でも課題とすることが出来る、広い概念を有しています。

*情報科目の単位の早期認定

(平成18年度より実施)

高等学校における教科「情報」(選択必修科目)の導入により、入学者に能力差が見られます。大学で学習する内容を十分クリアーしていると認められた学生は、早期に単位を認定する方法が取り入れられます。

*外国語教育の改革

(平成19年度より実施)

全学部で外国語の履修単位が8単位、1年性必修になります。英語とその他の外国語にわけ、1言語8単位の履修を可能にし、学生の主体的な選択の幅を拡大しました。大学教育の早期の段階で、集中して十分な外国語教育を展開することが、新しい学習へのステップになることを期待しての措置です。

*新設科目

(毎年新設科目が生まれている)

岩手大学論、岩手大学ミュージアム論、ジェンダーの歴史と文化、また現代GPとかかわって知的財産入門、著作権法概論、知財ワークショップ、さらに図書館への招待、キャリアを考えるなどの科目が生まれています。平成19年度を前に、新分科会が活性化すると、もっと大きな科目の改編が進むものと期待されています。

全学共通教育企画・実施部門

*全学共通教育としての転換教育の実施 (平成19年度より実施)

全入時代に入り、大学の門は広がっています。大学で何をするのか、明確な目標設定できない状態の学生が多く入学することも予想されます。同時に、学生に社会性を身につけさせることは、なかなか厳しい仕事になっています。「まじめ」で「ひたむきに努力する」岩大学生気質が変化することすら予想されず。そこで全学共通教育科目として転換教育（初期ゼミ、基礎ゼミ等）を実施することを決定しました。学習のおもしろさを発見する転換教育は、専門教育と教養教育、両者への導入の役割を持っています。

下に転換教育の概要を示しました。



*新分科会の構築～全教員担当体制へ (平成19年度より実施)

*新分科会

平成17年12月28日のセンター運営会議で、平成19年度から全学共通教育（転換教育を含む）を全教員体制で実施することが決定されています。すべての教員が、いずれかの分科会に属し、全学共通教育にかかわることになりました。新分科会は、授業に直接かかわる教員からなる、機能を重視した、新しい組織です。

*新分科会と専門研究分野

新分科会は、全学共通教育を進める実践的な組織です。全学共通教育にかかわって、連絡・調整をはかるばかりか、時には教育実践力を高めあう場にもなります。土俵は共通教育ですから、担当者の専門分野に必ずしも一致する必要はないと考えております。

*新分科会と岩手大学の全学共通教育

新分科会は岩手大学の共通教育に新たな息を吹き込み、新しい芽を育てるものです。現代社会が直面する課題でありながら、日本のどの大学も「ESD 持続可能な未来のための教育」を共通教育の旗印に挙げた例はありません。岩手の‘大地’と‘人’と共に生きる大学にふさわしい旗印と考えております。共通教育を通して、ESD マインドの芽が育ち、大学生活全体を通して大きく成長する、その契機を新分科会が用意すると位置づけただけであれば幸いです。地域の課題を織り込み、イートハーブの学び舎でなければ学べない科目設定・学習方法を図り、学びの銀河を全学教員担当体制で学生と共に作り上げることが、魅力ある大学づくりの確実な一歩と考えております。

全学共通教育企画・実施部門

その他の活動報告

全学共通教育企画・実施部門 山崎 憲治

*高大連携事業

高大連携事業は全国で急速に進みつつあります。大学進学希望者の全入時代を迎える中で、研究や教育の実際を体験的に知り、大学教育への期待を明確にすることは必要なことです。高校側にとっては骨太の進路指導をつくる契機になります。大学の魅力は何処にあるか、高校生が現実に学ぶ意義は大きいと思います。

岩手大学の高大連携事業には、高校生のための体験入学、ウインターセッション、そして高校への出張講義などがあげられます。本年の展開と課題を述べてみます。

*高校生のための体験入学

この取り組みは平成17年度から正式に始まった事業です。岩手大学に通学可能な高校と岩手大学が「協定書」を結び、高校生に大学で行われている講義の受講を認めるものです。高校生は放課後、大学の授業に駆けつけるわけですから、受講できる講義は限られます。下表は本年度高校生に開講した授業です。講義をきちんと受け所定の手続きをふんだ生徒には、修了書が授与されます。この修了書をもって、各高校の校長が自校の単位修得として認定する方法も取られています。

*ウインターセッション

ウインターセッションは岩手県における高大連携事業の中核に位置しています。岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、盛岡大学、富士大学の5校が特色ある講義内容を組んで参加しています。高校生は全県から集まり、国立岩手山青年の家等に宿泊し、用意されたバスで希望する大学に通ってきます。平成17年度は12月25日から27日の3日間実施されました。

岩手大学のセッションに参加した高校生は1・2年生78名。本年度、岩手大学が用意した科目は、工学部、農

学部を中心にしたものでした。昨年までに人文社会学部、教育学部のセッションが行われていたためです。今年度で全学部が一巡したわけですから、次回はいずれの学部からも講師をお願いすることになると思います。

この講座で興味と関心を呼び起す生徒も少なくありません。高校の日常の授業では出来ない企画です。そのためにも、ウインターセッションでは多様な切り口が用意される必要があると思います。

「岩手の高校生を育てよう」という課題は主催した5大学の共通項です。同時に、岩手大学ではこのような可能性を示すことが出来るというアピールも、きわめて肝心なことだと思っております。

高校生はこの3日間、講義だけでも630分を受講しています。全体講演、開会・閉会式、ミュージアム見学をあわせれば、800分を超えています。青年の家で行う話合い、あるいはレポート作成の時間をそこに加えれば、1000分の大台に乗ります。学習指導要領で示されている1750分の授業時間が確保されれば、単位認定の基本条件はクリアされることになります。このセッションでの受講時間と、各校で実施している「出張講義」等の時間、レポート作成時間等を勘案して、1単位としての認定に必要な時間確保してはいかかであろうか。各校で学校設定科目を設け、ウインターセッションの受け皿体制を造ることはそれほど困難なことではないと思います。

*出張講義

学部単位で「出張講義」が行われています。しかし、全学的な実施体制には至っておりません。学部間の調整を取りながら、高校に対する「出張講義」を全学的な課題にすることは高校との連携をつくるうえで肝心なことです。岩手大学では活発に取り組まれています。

高校生のための体験入学 平成17年度実績

授業科目名	欧米の文学	日本の歴史と文化	社会的人間論	地域と社会	自然と数理	芸術の世界	倫理学の世界	自然と法則	岩手大学論
担当教員名	長野俊一	樋口知志	塚本善弘	高橋宏一	石川明彦	田中 恵	宇佐美公生	八木一正	後藤尚人 (コーディネーター)
曜日	水	水	水	水	水	水	月	月	月
校時	9・10	9・10	9・10	9・10	9・10	9・10	9・10	9・10	9・10
前期受講高校生数	3	2	前期未開講	1	4	2	前期未開講	前期未開講	前期未開講
後期受講高校生数	5	6	4	7	5	後期未開講	5	5	2

全学共通教育企画・実施部門

*近隣大学との連携を図る取り組み

*北東北3大学(岩手大学・弘前大学・秋田大学)単位互換制度

各大学が相互に授業科目をリクエストして、学生の要望に応えるという取り組みです。1つの大学が他の2大学のカリキュラムから自分の大学で開講して欲しいと思う科目を依頼すると、その科目が夏季の集中講義として開講されます。例えば、岩手大学が秋田大学に「秋田の農B」という科目をリクエストすれば、岩手大学にてこの「秋田の農B」が夏季の集中講義として開講されます。

この試みは、平成15年度から実施されています。

北東北3大学単位互換制度 平成17年度実績

		派遣先(集中講義開講大学)				
		岩手大学	弘前大学	秋田大学		
派遣元大学	岩手大学	\	心の科学(織田 信男)		欧米の歴史と文化(佐藤 芳彦)	
			現代社会の社会学(塚本 善弘)		自然のしくみ(武井 隆明)	
	弘前大学		世界の地域・国・民族(秋葉 まり子)			科学・技術の発展(祐川 幸一)
			創造する人間(児玉 忠)			宇宙と地球の科学(小菅 正裕)
	秋田大学		秋田の農B(寺井 謙次)	生命の連続性(石井 照久)		\
			日本語の諸相(日高 水穂)	星の世界(上田 晴彦)		

*いわて5大学単位互換制度

平成14年度より、岩手大学、岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学の5つの大学で単位の互換を行っています。各大学で受け入れた学生は特別聴講学生となり、検定料・入学料・授業料は徴収されません。

下表は平成16年度の特別聴講学生数と受講した科目数を示しています。

いわて5大学単位互換制度 平成16年度実績

		開講大学										合計			
		岩手大学		岩手県立大学		岩手医科大学		富士大学		盛岡大学					
		聴講者数	科目数	聴講者数	科目数	聴講者数	科目数	聴講者数	科目数	聴講者数	科目数	聴講者数	科目数		
学生所属	岩手大学	\		5	13	3	4	0	0	0	0	8	17		
	岩手県立大学			13	24	0	0	0	0	1	1	14	25		
	岩手医科大学			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	富士大学			1	5	2	11	0	0	\		0	0	3	16
	盛岡大学			6	5	8	17	1	1			0	0	15	23
合計		20	34	15	41	4	5	0	0	1	1	40	81		

全学共通教育企画・実施部門

放送大学活用研究プロジェクト：報告と予定

全学共通教育企画・実施部門（併） 後藤 尚人

* 17年度：実施報告

岩手大学と放送大学は「単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト」として、平成17年度に以下の7科目（表記は「岩手大学科目名 / 放送大学科目名」）を開講しました。

- * 「初級韓国語（入門）/ 韓国語 I('02) & 韓国語 II('02)」（前期：科目履修生）
- * 「心の科学 / 心理学初歩 ('02)」（前期：コンテンツ利用）
- * 「現代社会と著作権 / 現代社会と著作権 ('02)」（前期：科目履修生）
- * 「分子生物学 / 分子生物学 ('05)」（前期：コンテンツ利用）
- * 「生活空間論、建築文化論 / 住計画論 ('02)」（後期：科目履修生）
- * 「細胞生物学 / 細胞生物学 ('03)」（後期：科目履修生）
- * 「アグリビジネス論 / アグリビジネス ('02)」（後期：科目履修生）

その結果、後期の履修申告手続きや外国語の単位設定の問題、コンテンツ利用時の教育効果など、いくつかの課題が見えてきました。こうした課題の解消と、より効果的な放送大学の利用・活用法を検証するため、今後もプロジェクトを継続することになりました。

* 18年度：実施予定

平成18年度は17年度の反省点を踏まえ、以下の科目をプロジェクトとして開講します。

岩手大学&放送大学岩手学習センター：単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト

岩手大学における教育環境の問題点が放送大学岩手学習センターを活用することでどの程度解消できるのか、また、そのためには何が課題となるのかを検証するため、平成18年度に以下の科目をそれぞれの形態で開講する。

【平成18年度実施分】

科目分類 科目名 [岩手大学]	科目分類 科目名 [放送大学]	メディア	受講者数	学期	利用形態	受講曜日 時間 (随時可)	受講場所	活用目的	活用理由 & 方法	補助教員等
共通基礎科目 「初級韓国語 入門」	共通科目 「韓国語入門 I (06)」	テレビ	40	前期	科目履修生	月9・10 & 水9・10	岩手大学 LL教室	担当者不足 の解消	*担当者不足により1クラスしか開講されていないため、TAによるクラスを別途開講。	ネイティブTA (河京希)
共通基礎科目 「初級韓国語 発展」	共通科目 「韓国語入門 II (06)」	ラジオ	40	後期	科目履修生	月9・10 & 水9・10	岩手大学 LL教室	担当者不足 の解消	*担当者不足により1クラスしか開講されていないため、TAによるクラスを別途開講。	ネイティブTA (河京希)
教養科目 「著作権法概論 (人間と社会)」	専門科目 「著作権法概論 (06)」	ラジオ	50	後期	科目履修生	水9・10	放送大学 岩手学習 センター	カリキュラムの充実	*知的財産関係科目充実のために、放送大学の科目を指定する。	放送大学 (客員教授) 岩手大学 (法学系教員)
専門科目 「文化論特講 I」	専門科目 「芸術・文化・社会 (06)」	テレビ	25	前期	科目履修生	火7・8	放送大学 岩手学習 センター	カリキュラムの充実	*人文社会科学部での文化論関連科目の充実を図る。	放送大学 (客員教授)
専門科目 「文化論特講 II」	専門科目 「マスメディア論 (06)」	ラジオ	25	後期	科目履修生	金3・4	放送大学 岩手学習 センター	カリキュラムの充実	*人文社会科学部で不足している分野の科目を補う。	岩手大学 後藤 尚人
専門科目 「建築文化論」	専門科目 「建築意匠論 (04)」	テレビ	20	後期	科目履修生	水7・8	放送大学 岩手学習 センター	担当者不足 の解消	*教育学部の芸術文化課程で非常勤講師が担当している科目を、放送大学の科目にかえる。	放送大学 (客員教授)

教育評価・改善部門

平成17年度FD合宿研修会報告

教育評価・改善部門 江本 理恵

* FD合宿研修会

erudio 3でお伝えしたように、9月1・2日に、国立岩手山青年の家において、平成17年度岩手大学FD合宿研修会を行いました。今回は、「高等教育機関としての岩手大学を考える」というテーマで、5つのプログラム（表1）を用意しました。

参加者は8つの班に分かれ、それぞれの班ごとに各プログラムに取り組みました。今回、班の構成を4学部それぞれの教員が必ず1名以上入るよう、また、年代構成もできるだけ幅広くなるようにしました。

プログラムⅠ・Ⅱでは、与えられた課題について、班ごとに議論を行い、その結果をまとめ、全員が集まったところで発表、議論、という流れで研修を行いました。ここでは、司会者、タイムキーパー、記録係などもすべて参加者同士で分担しました。

プログラムⅢでは、玉センター長からの問題提起に対し、様々な意見が出され、議論が行われました。

プログラムⅣでは、ここまでの議論等をまとめ、班単位で「提案書」を作成してもらいました。ここでは、非常に完成度の高い提案書が作成され、玉センター長を通

して、学長に届けられました。

研修の最後に簡単なアンケートを実施し、参加された先生方のご意見を集めました。その結果の一部を表2に示します。上記プログラムでの発表内容や提案書、アンケート等でいただいたご意見等については、後日発行する報告書でご報告させていただきます。

今回、担当者（江本）自身が大学教員1年目というまきに研修担当者でしたが、参加された方々の温かいご支援の下、無事に研修を終えることができました。今後、さらなる研鑽を積んで、「参加してよかった」と思える研修作りに取り組みたいと思います。

平成18年度は、大学教育における「キャリア教育」、「授業の目的、到達目標の明示とそれに対応した成績評価の方法と基準」などの問題を題材にして、プログラムを設計したいと思います。こちらから一方的に何かを伝える研修ではなく、参加された方々と共に考え、学びあい、議論し、成長できる研修を目指します。また、合宿研修を行う「場所」についても、検討を行います。

来年度もみなさまのご参加をお待ちしております。

表1：研修プログラム

プログラムⅠ	テーマ	高等教育機関として岩手大学に求められているニーズと課題
	実施方法	班単位で議論・意見をまとめ、全体で発表、議論を行う。（プログラムⅠ・Ⅱ共通）
プログラムⅡ	テーマ	今後、岩手大学としてどのような教育の取り組みを行えばよいか
	実施方法	（プログラムⅠ・Ⅱ共通）
プログラムⅢ	テーマ	今後の全学共通教育（教養教育）の理念について～ESD
	実施方法	玉センター長からの問題提起に基づき、全体で議論
プログラムⅣ	テーマ	今後の岩手大学の教育的取り組みについて
	実施方法	班単位での提案書の作成
プログラムⅤ	テーマ	授業支援システム（CMS）を活用した授業体験
	実施方法	パソコン研修室で授業体験

表2：参加者アンケート（一部）

Q. 今回の研修会について、どのような意識で参加されましたか？

積極的	やや積極的	やや消極的	消極的
2	13	17	6

(人)

Q. 結果的に、今回の研修会に参加して良かったと思いますか？

良かった	まあまあ良かった	あまり良くなかった	良くなかった
5	26	4	1

(人)



教育評価・改善部門

その他の活動報告

教育評価・改善部門 江本 理恵

*第2回全学共通教育科目授業公開

昨年の11月7日(月)から11日(金)までの5日間、全学共通教育担当教員の協力を得て、全学共通教育科目の全ての科目の授業公開を実施しました。これは、全学共通教育科目の授業を本学学生の保護者及び一般市民に参観していただく試みです。この授業公開を通して、保護者、市民の方々に、大学の授業に対する理解をいただくとともに、貴重なご意見をいただいて、全学共通教育科目の授業改善を進めていくことを目的としています。

残念ながら、今回も「大勢の方が参観に」というわけにはいきませんでした。参加された方からは、このような感想もいただいています。

- ・講義中いねむりをしている学生も見受けられましたが、岩大の学生は出席率もよく、授業中の私語もほとんどなく、まじめに取り組んでいるように思われました。
- ・今回、25年ぶりに大学の講義を学生たちと一っしょに受講する機会を与えてくださったことを感謝いたします。

「日常の授業を包み隠さず公開する」、この精神を大切に、今後の「授業公開」の実施方策について検討する予定です。

*平成17年度後期授業アンケート

前期に引き続き、後期の全学共通教育授業アンケートがはじまりました。今年度は前期の授業アンケートの返却が非常に遅くなり、大変申し訳ございませんでした。大いに反省し、できる限り早い返却を目指して、体制作りを行いたいと思います。

また、今後は、アンケート結果の分析結果から、岩手大学の学生の傾向や、制度上の問題点(開講科目数の調整、履修人数の調整など)を抽出し、その改善にも取り組んでいくことを考えています。

先生方にはお手数をおかけいたしますが、今後もよろしくご協力をお願いいたします。

*大学教育センター主催研究会

～中央教育審議会答申を読み解く～
我が国の高等教育の将来像(答申)

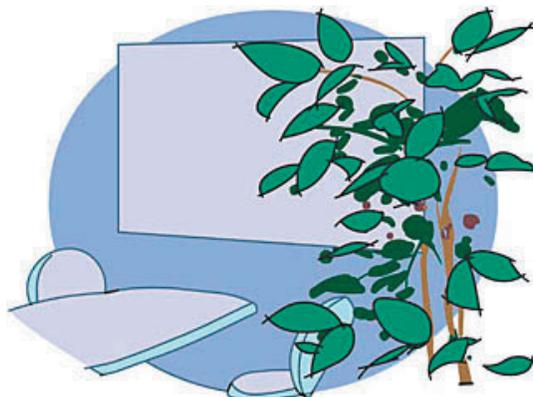
お正月気分も抜けきらない1月11日(水)、大学教育センターが主催する研究会が行われました。今回のテーマは、「平成17年1月に発表された中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像(答申)』を読み解く」です。

玉センター長の挨拶から始まり、専任教員3名が分担して、それぞれの見解を交えながら答申を説明し、そして、それを「岩手大学」の中でどのように活かしていくのかについて話しました。

参加者は30名超で、発表後には会場より色々な意見が出され、活発に議論が行われました。これらの議論を通して、センター側のさらなる勉強、情報収集、そして実際の取り組み方策の検討が必要なることがわかりました。このような研究会をきっかけに、大学教育そのものに関して、様々な意見交換や議論がされることは、岩手大学の教育全体にとっても望ましいことだと考えられます。

研究会の後には懇親会を兼ねた新年会が開かれました。大学教育センター関係教員、研究会に参加された先生、さらには飛び入り?で、平山学長、菊地理事、伊藤課長が参加されました。

今後も、このような研究会&懇親会を開催していきたいと思いますので、ぜひともみなさまにもご参加いただきたいと思います。よろしくお願ひします。



教育評価・改善部門

平成17年度前期 学生による授業アンケートに基づく 全学共通教育科目優秀授業一覧

【人間と文化】(19科目)

倫理学の世界	小林 睦
欧米の文学	長野 俊一
哲学の世界	開 龍美
適応の理解	早坂 浩志

【人間と社会】(23科目)

現代社会の社会学	塚本 善弘
経済のしくみ	笹尾 俊明
市民生活と法	

CLEARY WILLIAM BERNARD

現代社会と経済	田口 典男
---------	-------

【人間と自然】(18科目)

生命のしくみ	牧 陽之助
物質の世界	吉澤 正人

【外国語科目(英語)】(68科目)

英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	AHDAR ELVIS
中級英語	AHDAR ELVIS
英語 B	AHDAR ELVIS
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	BEHLING DANIELLE
英語 A	松林 城弘
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 B	BLAIR BENJAMIN REED
英語 A	寒河江 正行
英語 B	PEDERSEN KAREN
英語 B	松林 城弘
英語 B	ISHIKAWA PEGGY MARRI

【外国語科目(英語以外の外国語)】(50科目)

初級フランス語(入門)	加藤 隆
初級フランス語(入門)	加藤 隆
初級中国語(入門・発展)	中安 美恵子
初級中国語(入門)	吉野 寧恵
中級韓国語	楊 政亜
初級ロシア語(入門・発展)	長野 俊一
上級日本語 A	松岡 洋子

【健康・スポーツ科目】(40種目)

体力	佐々木 優次
サッカー	佐々木 博之
ソフトボール	大賀 圭造
バレー	小笠原 義文
バドミントン	大久保 香織
ゴルフ	石井 旨岡
テニス	吉田 実

【情報科目】(16科目)

情報基礎	柳田 久弥
情報基礎	五味 壮平
情報基礎	中西 貴裕

*授業科目区分の横の () 内の数字は、アンケート実施科目数です。



教育評価・改善部門

平成17年度 学生による授業アンケートに基づく

全学共通教育優秀授業選出手順

教育評価・改善部門会議では、今年度の優秀授業選出手順を以下のように決定しました。それに基づき、平成17年度前期の優秀授業科目の選出が行われました。平成17年度後期の優秀授業科目も、同じ選出手順にて選出される予定です。

これを、各項目について、右ページの式にあてはめ、点数を計算します。

1. アンケート実施授業科目を対象として、授業科目区分ごとに「優秀授業」を決定します。

5. 設問Dの項目a、b、c、d、g、h、i、k、m、n、o、uの平均値を合計※します。ここでいくつかの項目を集計よりはずしましたが、その理由は右ページの通りです。例えば、アンケート項目のうち、「手段」に関する項目については、授業（先生）によって「使う・使わない」の方針が違うので、今回は

2. 履修人数の少ない授業科目については対象から除外します。今回は、授業科目区分ごとにアンケートの回答者数を平均し、その平均の30%未満の回答者しか回答していない授業科目を対象から外しました。

3. 履修申告人数に比べて、アンケート回答者（回収枚数）が少ない授業科目については対象から除外します。今回は、回答者数が履修申告人数の70%以下の授業科目を、対象から外しました。

4. アンケートの設問D（右参照）の各項目について、評点を決め、平均値を算出します。今回の集計では、評点を選択肢の「そう思う」を2点、「まあそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「まったくそう思わない」を-2点としました。

		(平成17年度 前期 共通)			
D この授業に関し、下記の事項の回答として、右の4段階の中から最も近いものを1つ選んで、番号をマークしてください。		① そう思う ② すこしそう思う ③ あまりそう思わない ④ まったくそう思わない			
番号(1~4)を必ずマーク(●)してください。					
a.	教員は、授業の目標についてわかりやすく説明したと思いますか？	①	②	③	④
b.	授業の内容は、授業の目標達成に役に立つものだったと思いますか？	①	②	③	④
c.	教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明したと思いますか？	①	②	③	④
d.	教員が授業中に行った説明や指示はわかりやすいものでしたか？	①	②	③	④
e.	板書、ビデオ、プロジェクター等は、見やすかったですか？	①	②	③	④
f.	教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか？	①	②	③	④
g.	教員は、今後の授業内容や進み方について、わかりやすく説明していましたか？	①	②	③	④
h.	教員は、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示していましたか？	①	②	③	④
i.	教員は、毎回の授業中で、その回で学ぶべきポイントを示していましたか？	①	②	③	④
j.	教員から、学生が授業に参加するための働きかけ(発言を促すなど)がありましたか？	①	②	③	④
k.	教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていたと思いますか？	①	②	③	④
l.	教員は、レスポンスカードや小テスト等を行った結果を授業に活かしていたと思いますか？	①	②	③	④
m.	授業開始時間・終了時間も守られていたと思いますか？	①	②	③	④
n.	授業はよく準備されていたと思いますか？	①	②	③	④
o.	授業に対する教員の熱意を感じましたか？	①	②	③	④
p.	授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫して、問題を解決する機会があったと思いますか？	①	②	③	④
q.	授業中及び授業時間外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか？	①	②	③	④
r.	授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけることの大切さに気づく機会があったと思いますか？	①	②	③	④
s.	この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？	①	②	③	④
t.	この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？	①	②	③	④
u.	結果として、この授業を履修してよかったと思いますか？	①	②	③	④
E この授業に関して、疑問に思ったこと、印象に残ったこと、改善した方がよいこと、学習を振り返って感じたことなど、今感じていることを自由に記述してください。					
ご協力ありがとうございました					

教育評価・改善部門

「選出」基準からは除外しました。これらの項目は、説明をわかりやすくするために「黒板に板書する」という「手段」を用いた場合には、eの項目の結果によって、学生の反応（板書したことは学生に伝わっていたか）を確認することができます。

6. 各授業科目区分での優秀授業対象科目(アンケートを実施している、回答者数が規定を満たしている、回収率が70%以上)の20%程度が選出されることを目安とし、少なくとも15%以上、多くても25%以下とします。具体的には、5で算出した値について、上位から並べ、20%を目安として「上位群」を判定し、それらの授業科目を「優秀授業候補科目」とします。

7. 1～6の結果、抽出された授業科目を平成17度前期「優秀授業科目」候補科目とします。その後、自由記述項目等を加味して、教育評価・改善部門会議にて審議が行われ、「優秀授業科目」が決定します。

※：該当するのは、人間と自然・人間と文化・人間と社会・情報科目の区分に属する授業科目です。外国語科目(英語・英語以外の外国語)区分に属する授業科目では、項目a、b、c、d、g、h、i、m、n、o、rの合計、健康・スポーツ科目区分に属する授業科目では、項目a、b、c、d、e、f、g、h、j、k、l、m、pの合計になります。

評点 =

$$\frac{\text{「そう思う」の人数} \times 2 + \text{「まあそう思う」の人数} \times 1 + \text{「あまりそう思わない」の人数} \times (-1) + \text{「まったくそう思わない」の人数} \times (-2)}{\text{「そう思う」の人数} + \text{「まあそう思う」の人数} + \text{「あまりそう思わない」の人数} + \text{「まったくそう思わない」の人数}}$$

式：評点の算出方法

優秀授業選出時における集計除外項目とその理由

- e：板書やビデオ、プロジェクターは、「わかりやすい解説」を行うための「手段」であったり、もしくは教室の「環境」であったりするので、今回は優秀授業選出において集計除外項目としました。
- f：教科書や参考書、配布資料は、「わかりやすい解説」を行うための「手段」の1つと考えられるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。
- j：「働きかけ(発言を促すなど)」は、学生とのコミュニケーション(学生の疑問点や意向をくみ上げ、双方向性のある授業を実現する)のための「手段」の1つと考えられるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。(健康・スポーツ科目:i)
- l：「レスポンスカード」「小テスト」は学生の意見のくみ取りやわからないところを確認する(双方向性のある授業の実現)のための「手段」の1つと考えられるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。
- p：「問題解決活動」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。
- q：教養教育の目標の1つでもある、常識・通念を問い直すことができたかどうかについての項目です。今後、これらの目標を達成することも目指すべき授業の1つですが、授業の題材などにもよるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。
- r：「課題探求」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。
- s：授業科目によっては、必ずしも「学生が役に立つと思う授業」=「いい授業」ではないので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。(外国語科目:p)(健康・スポーツ科目:n)
- t：その授業科目で扱う題材や履修学生の所属学部などによって今後に対する意識も変わってくるので、今回は参考情報(除外項目)の1つとしました。(外国語科目:q)(健康・スポーツ科目:o)

専門教育関係連絡調整部門

*今年度の反省

今年度は、夏休み前に2度、部門会議を開催して、検討課題の整理を行いました。後期に入ってからでは部門会議を開催することができませんでした。月1回の部門会議を考えていた部門長としては残念です。反省しています。来年度は、月例の日をまず決めて、確実に部門会議を開催し、懸案の検討を行っていくつもりです。

*22単位キャップ制の見直し

当面の課題として、22単位キャップ制の緩和があります。実施から5年が経過し、その効果を検証した上で、平成19年度の改革に改善案を組み込む必要があります。キャップ制が学生の履修の意識変革に役立った点は評価できますが、自習時間の増加につながったかどうかは疑問もあります。これには、授業のあり方など単位制度の実質化と深く関係しています。その意味で、キャップ制の基本は堅持しつつ、実情に合わせた改善を図るための検討を大至急進めたいと考えています。

*厳格な成績評価

中期目標・計画が求めている厳格な成績評価は、単位制度の実質化という課題の中心に位置しています。いま、教育評価・改善部門(第2部門)において成績評価のガイドライン作りが進められています。その作成をまって、専門教育においても厳格な成績評価を学部を

専門教育関係連絡調整部門・部門長 玉 真之介
越えて大学として行っていくために、この部門で検討を進めたいと考えています。

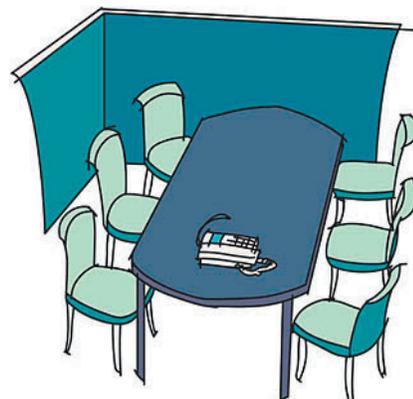
*「秀」の導入

全国の大学で成績評価をよりきめ細かく行うために、また優秀な学生の学習意欲を促進するために、「優」の上に「秀」を置く改革が進められています。北大ではすでに導入され、弘前大学も平成19年から導入が決まりました。岩手大学での早急に検討する必要があります。

*国際交流科目の単位認定

現在、留学生向けに英語による授業が国際交流科目として開講されています。英語の授業科目を増やすことが中期計画に書き込まれていますが、国際交流科目を留学生のみならず日本人学生にも受講してもらい、そこで留学生と交流してもらうことが有効な方策の1つです。そのためにも、国際交流科目を各学部において専門科目として単位認定していただく必要があります。

以上、課題のいくつかを述べましたが、来年度は少なくとも以上の4つには確実に結論を出したいと考えています。



大学教育センター活動日誌（主要行事のみ掲載）

2005年9月～2006年2月

日程	活動内容
9月1～2日	平成17年度FD合宿研修会
9月8～9日	第55回 東北・北海道地区大学一般教育研究会 岩手県立大学（岡田・中村・後藤・石川・江本）
9月14日	第6回 運営委員会
9月23～25日	第21回 日本教育工学会全国大会 徳島大学（後藤・江本）
10月1日	専任教員着任（山崎・福永）
10月12日	おかやまESD国際ワークショップ（山崎）
10月19日	第7回 運営委員会
10月19～24日	「岩手大学全学統一拡張Webシラバス」技術審査期間
10月20～21日	ESD-J地域ミーティングin岩手
10月25日	「岩手大学全学統一拡張Webシラバス」入札
11月7～11日	全学共通教育授業科目授業公開
11月11～12日	北海道大学教育ワークショップ（FD） ないえ温泉（江本）
11月11日	現代GP：「ワークショップ」科目検討会
11月12日	現代GP：青森・岩手県境産廃処理施設等の視察
11月16日	第8回 運営委員会
11月25日	第3回 全学共通教育企画・実施部門会議
12月8日	第4回 全学共通教育企画・実施部門会議
12月14日	第9回 運営委員会
12月16日	現代GP：「知的財産教育論」開講に向けての検討会
12月21日	第6回 教育評価・改善部門会議
12月28日	臨時運営委員会
2006年	
1月11日	大学教育センター主催研究会・新年会
1月13日	現代GPシンポジウム：持続可能な未来へ
1月24日	第7回 教育評価・改善部門会議
1月25日	第10回 運営委員会
2月3日	第5回 全学共通教育企画・実施部門会議
2月16日	第8回 教育評価・改善部門会議
2月17日	平成17年度前期全学共通教育科目優秀授業 表彰式
2月24日	第11回 運営委員会

現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）

「各学部の特徴を生かした全学的知的財産教育」と全学共通教育

全学共通教育企画・実施部門 山崎 憲治

平成 17 年度岩手大学は現代 GP の選定を受けました。事業の名称は「各学部の特性を生かした全学的知的財産教育」です。岩手大学は大学改革の柱の一つに知財教育の推進を挙げています。知財教育の推進で、人文社会科学部では弁理士へのチャレンジ、教育学部では子どもに知財教育できる小中高教員の養成、工学部農学部では研究成果を知財として活用できる研究開発、を挙げています。岩手大学では環境問題と知財をリンクさせて教育を進めることに、特色を作ろうとしています。

知財教育は日本の教育に求められている大きな課題です。経済のグローバル化が進む中、国家の戦略的課題でもあります（これは平成 14 年知財基本法の制定に示されます）。同時に、知財教育は創造性が問われるわけですから、教育課題として小学校段階から取り上げることが必要です。しかし、この課題に小・

中・高・大の一貫したカリキュラムを打ち立てることはなく、わずかに大学で専門科目として、設置される例を見るに過ぎません。知財の先進国であるアメリカ合衆国の大学の例をとっても、所謂共通教育から専門教育に亘って、知財教育を配置した例は、われわれが現地調査をしても見出すことはなかったのです。旧帝大といわれている大学でも学士課程を通して（共通教育・専門教育にわたって）知財教育を求めることは不可能です。岩手大学が現代 GP を取得することで、初めて可能になったことは特筆すべきです。下表に示すように、学士課程から大学院まで、また 4 学部いずれの学部でも、知財科目を設け、知財教育を実施する体制が確立しつつあります。共通教育がこの課題にどのようにかかわっていくのでしょうか。知財に関する共通教育科目は次のものです。1 年次には知的財産入門（新設科目）、

知的財産教育授業科目開設計画

区分	科目名	担当者	学部	開設学年	開設年度				備考
					平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	
全学共通教育科目	知的財産入門(新設)	松岡 勝実ほか		1年		前期			▶オムニバス方式、2回開設
	著作権概論(新設)			1年		後期			▶放送大学
	環境教育科目(既設)		1年						
	知財ワークショップ(新設)	非常勤講師6名		2年					▶夏休み集中講義
専門教育科目	知的財産法(特許法)(既設)	佐藤 祐介	人文社会科学部	3年	前期				
	法律学特講C(商標法)	佐藤 祐介	人文社会科学部	3年	後期				
	知的財産教育論(新設)	非常勤講師	教育学部			準備シミュレーション	後期		
	造形特別演習(既設)	田中 隆充	教育学部	2~4年	後期				▶平成17年度入学生から
	知的財産権概論(既設)	清水 健司	工・農学部	4年	後期				▶オムニバス方式
	特許法特別(新設)	佐藤 祐介	工・農学部	3・4年		後期			▶集中講義
	食糧生産システム学(既設)	三浦 靖	農学部	4年	前期				
大学院	ベンチャー企業論(既設:大学院)	安保 繁ほか	工・農学研究科		前期				▶オムニバス方式

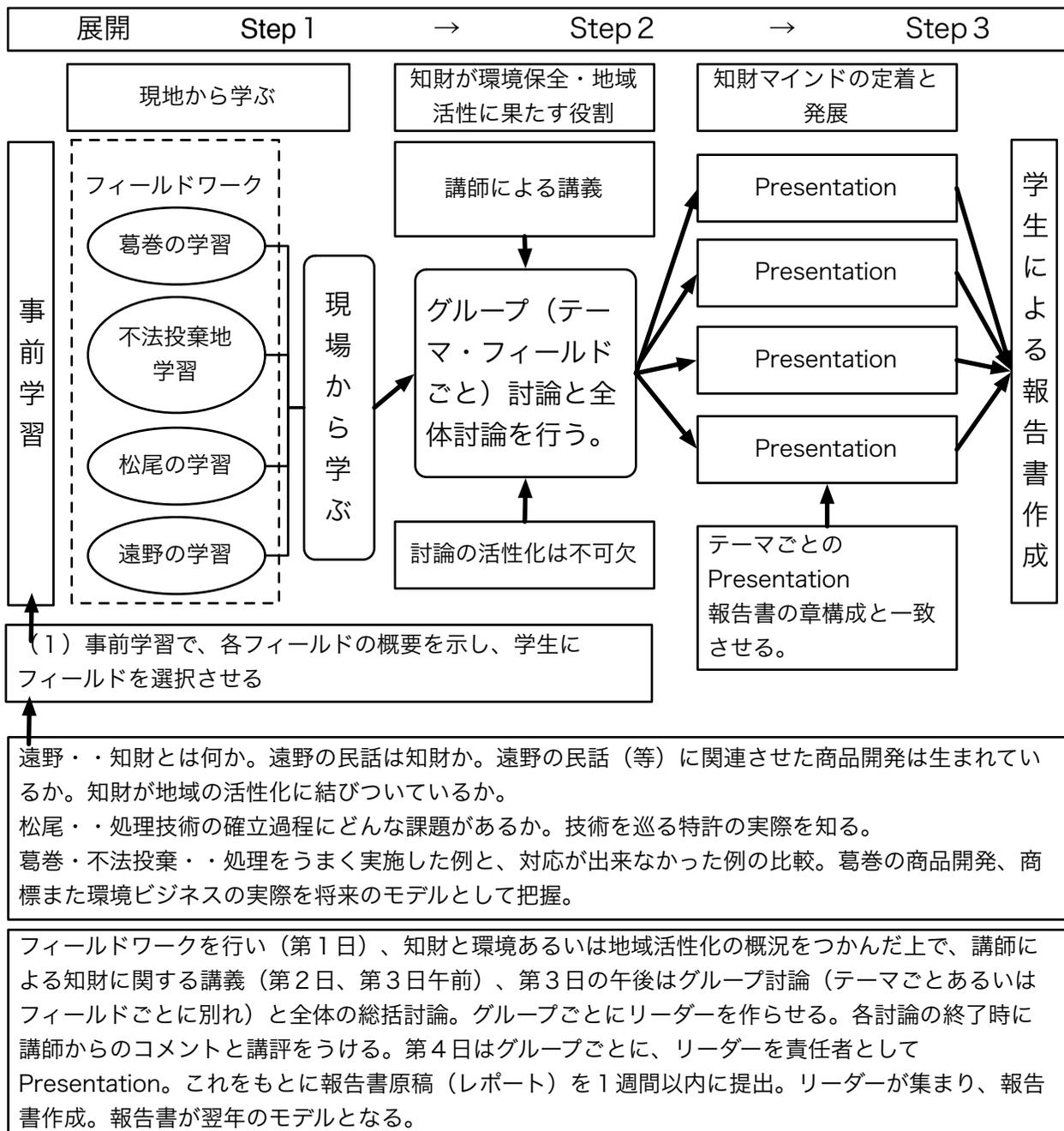
※上記は計画段階のものです。実際の講義名、担当者、開設時期・年度等は変更になることがあります。

現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代 GP)

著作権法概論 (放送大学利用) を、2 年次において、知財ワークショップを設けようとしています。また関連科目として環境教育科目を設けています。

岩手大学の現代 GP の特色は、「環境マインド」と「知財マインド」を兼ね備えた人材の育成を目指すところにおいています。全国の 11 の知財 GP 支援事業の中でも際立った特色、斬新性を有しています。この特色を具体的に

実現した科目に平成 18 年度から始まる「知的財産ワークショップ」があります。岩手の環境と自然の「持続可能な未来」に向け、知財がどのようにかわるか、あるいは知財を介してどのような「持続可能な未来」が可能かを、現地に学び、ワークショップ形式を取りながら問う科目です。下表にこの科目のプロフィールを示しました。



岩手大学全学共通教育の概要

1. 大学教育の基本

大学教育は、「4 (6) 年一貫教育」という観点から、教養教育と専門教育との相互連携によって営まれることになっています。

本学のカリキュラムも、「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」と規定されている大学設置基準第19条第2項にもとづいて編成されています。

2. 全学共通教育として実施される本学の教養教育

本学の教養教育は、全学共通の関心・責任・協力のもとに、全学部の教員による全学担当体制を組織して、「全学共通教育」として実施されています。

3. 本学の教養教育の理念

本学の教養教育は、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことを理念として実施されています。

4. 全学共通教育科目の二元的な構成とそれぞれの共通目標

本学の全学共通教育科目は、「教養科目」と「共通基礎科目」によって二元的に構成されています。

(1) 教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」という教養教育の理念にもとづき、特に「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という、3項目に則して設定されています。

- ① 学生がさまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を広く生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援
- ② 学生があらゆる分野の日常生活の営みの基礎になっている各種の常識・通念を掘り下げて問い直すことのできるほどのという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援
- ③ 学生が多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援

(2) 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目の教育目標は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の社会生活を進めるうえで、共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を習得させること、として設定されています。

5. 教養科目および共通基礎科目の内部区分

(1) 教養科目の区分

教養科目は、主題別に「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、「総合科目」及び「環境教育科目」の5つに区分されています。教養科目として学ぶ授業科目は、これらの区分に沿って選択することになります。

(2) 共通基礎科目の区分

共通基礎科目は、「外国語科目」、「健康・スポーツ科目」および「情報科目」に区分されています。

Iⁿ Assistant (アイ・アシスタント)

教育評価・改善部門 福永 良浩

1997年の大学審議会の答申におけるシラバスの作成とその内容の充実の指摘などもあり、各大学でシラバスの整備が積極的に進められてきています。元来、シラバスは、学生に対して授業目的や計画等の情報を提供する使用説明書・仕様書としての機能とともに、履修方法や規定に関する担当者から学生への伝達機能を有していますが、さらに、授業内容を示す資料として大学における教育の外部評価や大学評価・学位授与機構における学位授与審査の際の修得単位の内容確認にも利用されています。また、近年の情報技術の急速な普及と機能の高度化に伴い情報ネットワークを介してのWebシラバスの公開も進んでいます。

以上のような状況において、教育課程の設計や成績評価のためのWebシラバスを利用した教育支援ないし授業支援システムとしての研究・開発は、今後、重要な役割を果たすものと考えられます。我々は、これまでシラバスなどの大学教育に関する電子化された情報の効果的かつ統合的な収集と教育課程との体系化を進めてきており、これにより多様化の進む教育課程の特徴を効果的に把握するための情報提示に関する検討を行ってきました。また、この「Iⁿ Assistant」の「I」には、Iwate(岩手大学)、Intelligence(知性)、Interactive(対話)、Integration(統合)、Ideal(理想)などのIがそれぞれに相乗効果をもたらすという意味を込めるのと同時に我々のWebシラバスに対する強い思いと期待が含まれています。

本稿においては、これまで開発を行ってきた「Iⁿ Assistant」(全学統一拡張Webシラバス)の概要と主な機能について簡単に紹介いたします。

* Iⁿ Assistant の概要

「Iⁿ Assistant」は、今まで各学部の異なるシラバスを全学統一したフォーマットで一元化を行い、さらに学生および教員の方々に個人専用ペー

ジを設け、科目に関する詳細な授業計画を立て、その授業記録やスケジュールを管理することが可能となっています。さらに、教室外学習の補完機能として課題やドリル機能などもあり、学習支援システムとしての活用も期待されます。

* シラバス登録・閲覧機能

シラバスの登録に関しては、全学部のシラバスを網羅できるように設計を行い、ユーザインターフェースに考慮して、全学統一したフォーマットしております。教員は担当している科目の一覧から容易に登録可能となっております。シラバスの閲覧に関しては、学生は時間割から履修した科目を視覚的に容易に選択でき、閲覧可能となっております。

* 授業記録機能

教員が授業の際に、シラバスに記載された内容に沿って授業が遂行されたかどうかの進捗や目標通りの授業が出来たかどうかなどを記録しておくことで、また学生に提示した教材や配布資料などを電子化して保管しておき、出席できなかった学生にも提示できることから有効に活用できるものとなっております。

* iカード機能、課題機能、ドリル機能、アンケート機能、コミュニケーション機能、グループ作業機能

これらの機能は基本機能であるWebシラバスに加えて、付加的な授業支援機能として構成されており、iカード機能は現在の紙でのレスポンスカードのWeb版、課題機能は課題の作成や提出機能、ドリル機能は各科目での重要な概念を繰り返しの学習によって知識定着を図る機能、アンケート機能はある事柄に対して学生に主観的な部分を問える機能、コミュニケーション機能はある

Iⁿ Assistant (アイ・アシスタント)

テーマに関して掲示板でさまざま議論をし、学生個々の意見を書き込んでもらう機能、グループ機能はあるテーマに関してグループ単位で議論し、その議論した内容などを掲示板やボックスを利用し作業できる機能として学習支援環境を整えています。

今後の予定ですが、18年度前期は大学教育総合センター・スタッフと兼務教員等の方々をお願いを致しましてシステムの問題点を洗い出し、後

期には全教員規模に試行を拡大して皆さまから幅広くご意見を頂き、システムを改善しつつ本格稼働 (H19) に備えたいと考えております。この試行期間に、将来先生方が授業で「Iⁿ Assistant」を有効活用して頂けるように、講義資料の電子化などの IT の観点とそれらを授業で効果的に用いるための授業改善の観点から、「IT・FD 研修会」を実施したいと考えております。

「IT・FD 研修会」スケジュール (予定)

平成 18 年 3 月下旬 : 「アイ・アシスタント」試行運用 説明会

対象 : 協力して頂ける兼務教員の方々

内容 : 基本機能の説明、シラバス入力、使い方のデモ、など

その他 (IT 実態調査) : IT・FD に関する要望の聴取

対象 : 全教員

平成 18 年度前期 : 上記の要望を踏まえた「IT・FD 研修会」

具体例 :

- A. 「電子化教材の作成 (基本) : 主に PDF などを利用した教材作成」
- B. 「電子化教材の作成 (応用) : 主に PowerPoint を利用した教育上効果的な教材作成」
- C. 「電子化教材の作成 (総合) : Word や Excel などの効果的活用法・便利機能の修得」など

9 月 : 「アイ・アシスタント」試行運用 説明会

対象 : 協力して頂ける全教員

内容 : 基本機能の説明、シラバス入力、使い方のデモ、など

平成 18 年度後期 : 前期で行った研修会後での改善点のフィードバックと

意見・要望を加味した「IT・FD 研修会」の実施 (対象 : 全教員)

12 月 : 「アイ・アシスタント」本格稼働 説明会

対象 : 全教員 (任意)

内容 : 基本機能の説明、シラバス入力、使い方のデモ、など

Iⁿ Assistant (アイ・アシスタント)

Iⁿ Assistant 個人専用トップページ

新着情報

学務課および就職課などからの様々な情報を表示します。

学務課：主に休講情報や教室変更などがあります。

就職課：主にセミナーの案内や就職情報の提供などがあります。

The screenshot shows the Iⁿ Assistant personal homepage. On the left is a navigation menu with categories like 'Webメール', 'トップページ', 'シラバス', '担当科目', '学習支援', 'コミュニケーション', 'グループ作業', '個人作業', '科目閲覧', 'システム管理', 'リンク', and 'ご意見・ご要望'. The main content area is divided into several sections: '新着情報' (New Information), 'My時間割' (My Class Schedule), 'Myカレンダー' (My Calendar), and 'Myスケジュール' (My Schedule). Each section has a corresponding callout box explaining its function for teachers and students.

My時間割

教員：担当授業科目の時間割が表示され、科目名を押すと当該科目の授業記録が行えます。

学生：履修科目が時間割と連動して表示され、当該科目のシラabus閲覧や様々な授業支援を受けることができます。

2005年度【後期】

	月	火	水	木	金	土
1-2	情報処理演習 A/ 68/AAA					
3-4						
5-6		情報基礎/ 47/CCC				
7-8						
9-10						情報基礎/ 47/DDD
集中講義	情報科教育法(教職科目) ○○○○○○○○(○○○○)					

Myカレンダー

大学の学年歴や行事(休講や教室変更を含む)などの様々な情報を月のカレンダーに表示します。また、学務情報やMyスケジュールとも連動し表示されます。

Myスケジュール

その日および今後の授業に関する様々な情報を自分のスケジュールとして管理できる。

教員：授業科目に関する予定などを入れ、今後の授業科目のスケジュールを管理できます。

学生：履修科目に関する担当教員からの重要な情報を保存し、履修科目のスケジュールを管理できます。

*この画面は開発中のものなので、実際と異なる場合があります。

編集後記

- ◇この冬の盛岡は記録的な大雪だったそうです。昨年4月に着任した私は、今年が初めての冬だったわけで、「うーん、さすが東北だ」などと勝手なことを思っていました。が、今年の大雪は、長く盛岡に住まれている方でも「こんなのはじめて」だったそうです。
- ◇「1年目がこの大雪なら、来冬からは『今年は雪が少ない』って思えるよ。」
このように声をかけてくださる方も多かったです。
- ◇昨年4月から今まで、とにかく岩手大学を知ること、今までの仕事を引き継ぐことでせいっぱいでした。なんといっても、こちらにくる前は学生同然だったわけで、「記録的な大雪」状態でてんやわんやでした。
- ◇2年目が始まるこの4月からは、通常業務+新しいことにも取り組まなくちゃ、と自分にいきかせてます。
- ◇4月からは、新しく3部門が加わって「大学教育総合センター」となります。この「総合」を活かした新しい試みに取り組み、しっかり地に足をつけて、みなさまの教育活動の支援を行いたいと思います。

(工房 うさぎごや)

erudio 4 2006年3月25日発行



国立大学法人岩手大学
大学教育センター

Iwate University : University Education Center

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

全学共通教育企画・実施部門 TEL : 019-621-6925

教育評価・改善部門 TEL : 019-621-6924

専門教育関係連絡調整部門 TEL : 019-621-6925

(部門共通) FAX : 019-621-6928